

This Page Is Inserted by IFW Operations
and is not a part of the Official Record

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

As rescanning documents *will not* correct images,
Please do not report the images to the
Image Problem Mailbox.

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公開実用新案公報 (U)

(11)実用新案出願公開番号

実開平5-16653

(43)公開日 平成5年(1993)3月2日

(51)Int.Cl. ⁵	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
B 6 5 D 43/16	Z	6540-3E		
21/02	B	2330-3E		
81/24	B	7191-3E		
// B 6 5 D 85/50	A	7445-3E		

審査請求 未請求 請求項の数 2 (全 3 頁)

(21)出願番号 実願平3-90151
(22)出願日 平成3年(1991)8月12日

(71)出願人 591039148
三菱油化バーデイツシエ株式会社
三重県四日市市川尻町1000番地
(71)出願人 591244878
玉井化成株式会社
北海道札幌市手稲区略2条4丁目4番38号
手稲工業団地
(72)考案者 久布白 兼三
三重県四日市市川尻町1000番地 三菱油化
バーデイツシエ株式会社内
(74)代理人 弁理士 菊川 貞夫

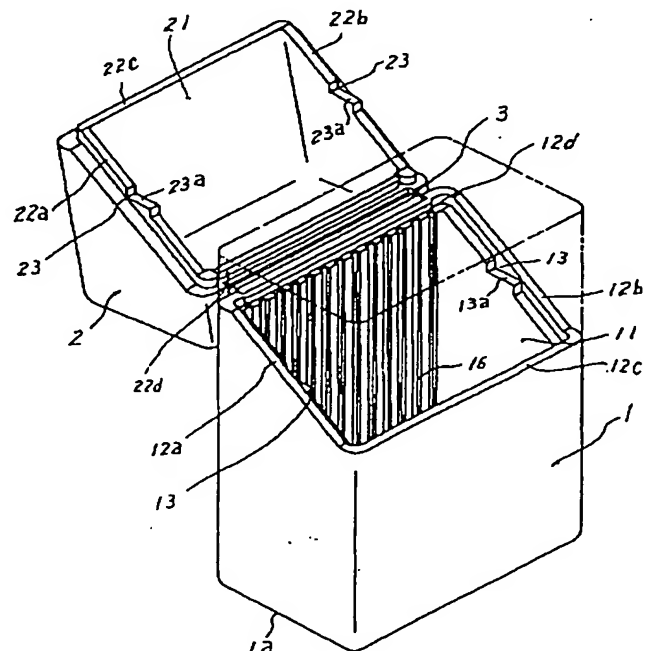
最終頁に続く

(54)【考案の名称】 包装容器

(57)【要約】

【目的】 身箱体と蓋箱体の斜め嵌合ができて収容物の出し入れに便利であり、かつ、嵌合時に蓋箱体のずれ落ちる不具合を解消する。

【構成】 熱可塑性樹脂発泡体製の身箱体1と蓋箱体2は相対向した傾斜面に形成されている開口面部11、21で接合自在とされ、この身箱体1と蓋箱体2の傾斜している相対向した縁辺部12a、12b、22a、22bは嵌合自在である相欠き状に形成されていると共に、これら相対向した縁辺部12a、12b、22a、22b上には該縁辺部12a、12b、22a、22bとは傾斜方向を異ならせた係止部13、23を設けてある。また、蓋の開閉操作を容易にするため、身箱体1と蓋箱体2は薄肉条部32を設けてあるヒンジ部3により一体的に連結されているのが好ましい。



1

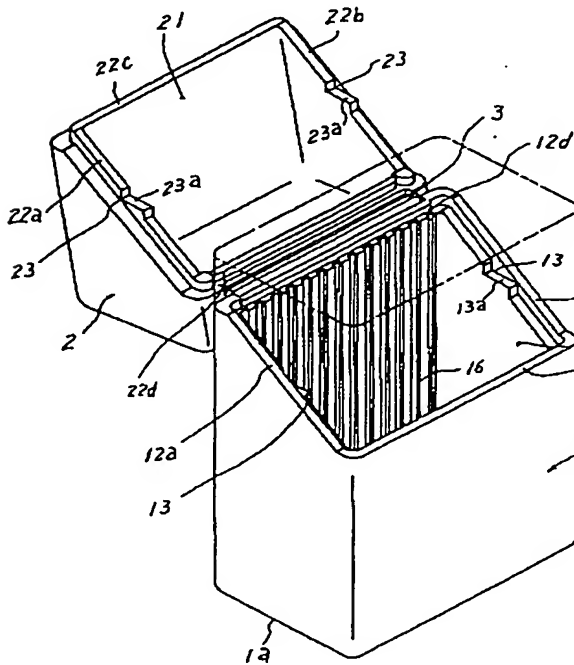
【実用新案登録請求の範囲】

【請求項 1】 熱可塑性樹脂発泡体製の身箱体と蓋箱体は相対した傾斜面に形成されている開口面部で接合自在とされ、この身箱体と蓋箱体の傾斜している相対向した縁辺部は嵌合自在である相欠き状に形成されていると共に、これら相対向した縁辺部上には係止部を相対応させて成ることを特徴とする包装容器。

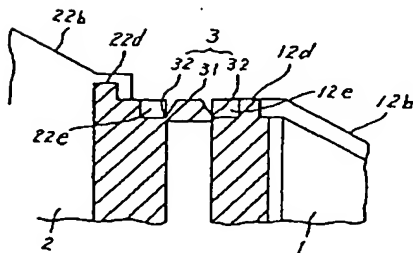
【請求項 2】 身箱体の傾斜していない相対向した縁辺部のうちの該身箱体の底面から高い位置にある縁辺部と、この縁辺部に対応した蓋箱体側の縁辺部とは該両縁辺部に沿って薄肉条部を設けたヒンジ部により一体的に連結して成ることを特徴とする請求項 1 記載の包装容器。

【図面の簡単な説明】

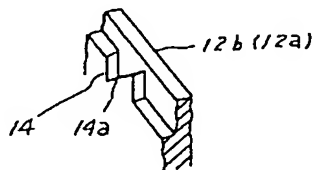
【図 1】



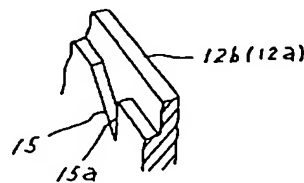
【図 3】



【図 4】



【図 5】



2

【図 1】 本考案の 1 実施例を示す斜視図である。

【図 2】 同上平面図である。

【図 3】 図 2 の A-A 線における部分断面図である。

【図 4】 身箱体側に設ける係止部の変形例を示す斜視図である。

【図 5】 身箱体側に設ける係止部の他の変形例を示す斜視図である。

【符号の説明】

1 は身箱体、1 a は底面、2 は蓋箱体、3 はヒンジ部、1 1 は開口面部、1 2 a・1 2 b は傾斜している縁辺部、1 2 c、1 2 d は傾斜していない縁辺部、1 3、1 4、1 5 は係止部、2 1 は開口面部、2 2 a、2 2 b は傾斜している縁辺部、2 2 c、2 2 d は傾斜していない縁辺部、2 3 は係止部、3 2 は薄肉条部である。

フロントページの続き

(72) 考案者 山路 弘行
三重県四日市市川尻町1000番地 三菱油化
バーデイツシエ株式会社内

(72) 考案者 滝浦 真一
札幌市手稲区曙2条4丁目4番38号 手稲
工業団地 玉井化成株式会社内

【考案の詳細な説明】**【0001】****【産業上の利用分野】**

本考案は、魚、野菜、肉、乳製品、特に長ねぎやアスパラガス等のように細長い生鮮物を輸送や保管する時に用いて便利である包装容器に関する。

【0002】**【従来の技術及び考案が解決しようとする課題】**

生鮮物等を輸送する発泡合成樹脂製の包装容器として、身箱体の上縁部に相欠き状の段部を設けて蓋箱体を嵌合自在に構成したものは従来周知であり、この周知の包装容器は身箱体と蓋箱体の嵌合縁は水平状態で嵌合している。このため、輸送されてきた生鮮物等の商品をそのまま店頭で販売するときは、身箱体の下に台を置いて前傾状態に支持しないと、収容されている商品が見えにくいとか、細長い長ねぎやアスパラガス等は出し入れに不便であるという問題があった。

【0003】

そこで、本考案者等は包装容器を用いて輸送されてきた生鮮物をそのまま店頭等に置き、販売する場合に便利であるように身箱体と蓋箱体を斜めに嵌合できる容器を試作してみたが、この試作された容器を段積みすると、下側の容器には荷重がかかり過ぎるため、傾斜していない相対向した嵌合縁のうちの前側の部分（底面から低い方の嵌合縁）が破損して身箱体より蓋箱体がずれ落ち、段積み状態を維持できなくなるということが判った。

【0004】

本考案は上記の点に鑑みてなされたもので、その目的は身箱体と蓋箱体の斜め嵌合ができて収容物の出し入れに便利であり、かつ、段積みしたときの蓋箱体のずれ落ちる不具合を解消した包装容器を提供することにある。

【0005】**【課題を解決するための手段】**

上記目的を達成するために、本考案の特徴とする包装容器は熱可塑性樹脂発泡体製の身箱体と蓋箱体は相対応した傾斜面に形成されている開口面部で接合自在とされ、この身箱体と蓋箱体の傾斜している相対向した縁辺部は嵌合自在である

相欠き状に形成されていると共に、これら相対向した縁辺部上には係止部を相対応させて設けて成るものである。

【0006】

そして、蓋の開閉操作を容易にするため、身箱体の傾斜していない相対向した縁辺部のうちの該身箱体の底面から高い位置にある縁辺部と、この縁辺部に対応した蓋箱体側の縁辺部とは該両縁辺部に沿って薄肉条部を設けたヒンジ部により一体的に連結されているように実施するのが好ましい。

【0007】

【実施例】

以下に、本考案の実施例を添付図面を参照しながら説明する。

図1～図3において、1は身箱体、2は身箱体1に嵌合できるようにした蓋箱体で、何れも型内ビーズ発泡成形による熱可塑性樹脂発泡体製である。そして、身箱体1と蓋箱体2の開口面部11, 21は相対応した傾斜面に形成され、この開口面部11, 21の相欠き状に形成された縁辺部で身箱体1と蓋箱体2は斜めに嵌合自在であると共に、身箱体1と蓋箱体2は後述するようにヒンジ部3により連結されている。

【0008】

図示の場合、身箱体1の傾斜している相対向した縁辺部12a, 12b及び傾斜していない相対向した縁辺部12c, 12dと、蓋箱体2の傾斜している相対向した縁辺部22a, 22b及び傾斜していない相対向した縁辺部22c, 22dは相欠き状に形成されているが、この相欠きは全周に形成する必要はなく、少なくとも身箱体1の傾斜している相対向した縁辺部12a, 12bと蓋箱体2の傾斜している相対向した縁辺部22a, 22bに形成すればよい。そして、段積み時の安定性をより要求する際は全周に相欠きを設けるのが好ましい。

【0009】

身箱体1の傾斜していない相対向した縁辺部12c, 12dのうちの該身箱体1の底面1aから高い位置にある縁辺部12dと、この縁辺部12dに対応した蓋箱体2側の縁辺部22dとはヒンジ部3により一体的に連結されている。そして、ヒンジ部3は上記両縁辺部12d, 22dに沿って設けた中央の肉厚条部3

1と該肉厚条部31の両側に設けた薄肉条部32により形成されている一方、この両薄肉条部32、32にそれぞれ隣接した縁辺部12d、22dの部分には身箱体1と蓋箱体2の嵌合時に肉厚条部31の各一側部分を受け入れるための面取り部(逃げ)12e、22eを設け、ヒンジ部3による開閉操作が容易にできるように考慮されている。

【0010】

身箱体1の傾斜している相対向した縁辺部12a、12bと蓋箱体2の傾斜している相対向した縁辺部22a、22bには該縁辺部12a、12b、22a、22dの傾斜方向を異ならせた係止部13、23を相対応させて階段状に設け、この係止部13、23の水平な接合面部13a、23aによって嵌合時における蓋の安定性を図っている。そして、このような係止部13、23を設けることで段積み時のずれ落ちを防止することができる。したがって、身箱体1と蓋箱体2は必ずしもヒンジ部3により連結されていなくてもよいが、より安定性を求める場合や、蓋の開閉を容易にしたい時にはヒンジ部3で連結されているのが好ましい。

【0011】

傾斜している縁辺部12a、12b、22a、22dに設けられている相欠きは内側低段部でも内側高段部でもよいが、係止部13、23は蓋を嵌合した際の見栄えをよくするためには内側段部に設けるのがよい。そして、内側段部に係止部を設ける際、商品の出し入れで係止部を破損させないためには内側低段部に係止部が設けられているのが好ましい。

【0012】

また、水平な接合面部13a、23aを有する係止部13、23に代えて、図4及び図5に身箱体1側の係止部の変形例がそれぞれ示されているように、接合面部14a、15aを縁辺部12a、12bの傾斜方向とは逆方向へ傾斜させた係止部14、15でもよく、蓋箱体2側には該係止部14、15と対応した係止部を設けるものである。

【0013】

なお、身箱体1の相対向した一方の組の内壁(傾斜していない縁辺部12c、

12d側の内壁)には収容物を仕切るための仕切り板支持用の突条16を平行させて設けてある。また、身箱体1と蓋箱体2の素材である熱可塑性樹脂発泡体としては発泡ポリスチレン、発泡ポリプロピレン、発泡ポリエチレン等が用いられ、その密度としては $0.015 \sim 0.05 \text{ g/cm}^3$ が好ましい。

【0014】

【考案の効果】

本考案は上記の如くであって、身箱体の開口面部が傾斜面に形成されているため、特に細長い収容物の出し入れには至極便利であることは勿論のこと、身箱体と蓋箱体の傾斜した縁辺部には互いに嵌合自在である相欠きとともに係止部を設けたので、身箱体と蓋箱体の嵌合時に蓋箱体のずれ落ちる心配がなく、段積み時における荷重が身箱体の底面より低い方の縁辺部にかかり過ぎる不具合も解消して、段積み時の安定性は一段と向上する。また、ヒンジ部により身箱体と蓋箱体を連結することで、蓋の開閉操作が容易となる等、上述した点と相俟ってその実用的価値は極めて多大である。